

Sotobakomachi, the Fifth Chapter of Yokyoku-gige: A Bibliographical Introduction and Reprint

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Nishimura, Satoshi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/47501

『謡曲義解』五「卒都婆小町」

― 解題と翻刻 ―

西村 聡

金沢市立玉川図書館近世史料館稼堂文庫蔵『謡曲義解』の存在は、早く昭和一二二年（一九三七）開催の宝生紫雪追善記念能楽展覧会（於金沢市丸越ホール）に出展され、その「目録并二解説」（『宝生』第一六卷第六号）に、

69 謡曲義解 半紙本六冊 金沢市立図書館蔵

高砂、田村、熊野、班女、鶉飼、難波、兼平、千手、卒都婆小町、舟弁慶、老松の十一番を藩命により、加賀藩中に於て註釈したる稿本である。

と記載されて多くの人に知られたはずであるが、今日に至るまで活字翻刻は実現せず、謡曲注釈書としての検討や評価は行われていない。「藩命により、加賀藩中に於て」書かれたことは、第一冊に挟み込まれた紙にそう読める記述が含まれるからであり、同じく前田掃部（孝亮。文政九年（一八二六）没）や津田佐七郎（政知）が関与していることにより、成立時期は文政七年に没した一二代藩主前田斉広の晩年かと推定される。ただ、斉広時代にはすでに佐久間寛台の『謡

言粗志』二百十番（文化六年（一八〇九）内編、同九年外編）が書かれていて藩宝扱いされていたから、『謡言粗志』とは別に謡曲注釈書が必要とされた理由は、『謡曲義解』第一冊冒頭の「大意」を読んでも明らかでない。

本稿では現存六冊―一番の中から最も詳述されている「卒都婆小町」一番（『謡曲義解』第五冊）を取り上げて翻刻することとした。追って他の冊の一〇番についても翻刻を行い、『謡曲義解』全体の特徴を考察したいが、「卒都婆小町」が他の冊の一〇番に比べて二倍以上の分量となったのは、「卒都婆小町」の本文を掲げてその部分の解釈や典拠に言及するだけでなく、仮名草子作者として知られる鈴木正三（一五七九〜一六五五）による改作「面影小町」（『鈴木正三道人全集』〈山喜房仏書林、一九六二年〉、『未刊謡曲集二十一』〈古典文庫、一九七三年〉に翻刻されている）及び「秀」による改作「有明小町」の改訂本文を比較して、改訂の「正三作意」や「秀ノ愚意」を解説することに原因がある。つまり、原作「卒都婆小町」の本文に即した解釈よりも、

「秀」は正三同様、原作を批判的に読んで問題点を探し出し、「秀」なりの理屈で筋の通った本文に改訂することに重点を置き、雄弁であるように見える。「秀」は「卒都婆小町」の注釈以前に、この改訂に積年心魂を入れて「有明小町」を作り、改訂の跡、——「着眼受用ノ工夫」を今回解説することを注釈の中身とするつもりでいる。

改訂と注釈を合わせて「開悟ノ道標」たる自負もうかがわれ、「秀」と『謡曲義解』の著者は同一人物らしいが、すると「卒都婆小町」以外の作品にはどういふ関心で注釈を行うのか、あるいは『謡曲義解』の著者は複数いるのかという問題が浮上する。他の作品の注釈記述を検討できていない今は、そうした問題があることを記すにとどめて、まずは「卒都婆小町」に限って、『謡曲義解』の注釈の特徴をいくつか書き留めておきたい。以下、段分け等は日本古典文学大系『謡曲集上』に依拠する。引用本文は『謡曲義解』所掲の形（宝生流寛政版謡本）による。また、「卒都婆小町」を【卒】、「面影小町」を【面】、「有明小町」を【有】と略称する。

まず【卒】1段「サシ」の後半、「逢難き如来の」以下を、【面】では大きく改め、続く「上ゲ歌」「生れぬ先の」以下を削り、代わりに①難波辺に着いたワキ僧が浦の景色を眺めて休むことにしている。本来はワキの登場と到着を1段、シテの登場と到着を2段とし、2段は、②「次第」「身は浮草を〜」、③「サシ」「哀や実を〜」、④「下ゲ歌」「都は人目〜」、⑤「上ゲ歌」「月諸共に〜」、⑥「着キゼリフ」の順に構成されるところを、『謡曲義解』は⑤(十①)②③④⑥の順に記載している。そして、【卒】1段「上ゲ歌」「生れぬ先の」の

注釈に「正三八高野山ヨリ出タル僧ト云ニ心ヲ留ル子モナシト云ハフデキ也ト云ヘトモソレハ余リ穿タ説ナリ」と正三の【卒】批判の当たらないことを論じている。この正三の【卒】批判は【面】に挿入されているわけではなく、正三の弟子恵中編『驢鞍橋』中巻（万治三年（二六六〇）刊。前掲『鈴木正三道人全集』所収）の「面影小町」（八十三）直前の文章（八十二）に、

亦曰、卒都婆小町ノワキノサシニ、抑、是ハ高野山ヨリ出タル僧ト云時ハ、先ツ弘法ヨ、然ルニ我ガ為ニ心ヲ留ル子モナシト云ハ、フデキ也。ナニ出家ノ、亦子ヲ持ト云事有ンヤ。

とあるのを引いていることになる。また、『謡曲義解』が③の前に「正三八サシ旅老女若女トセリ」と記しているのは、前掲『未刊謡曲集二十一』所収の「佛小町」では②の「シテ次第」の前に「老女ツレ若女」とあり、『驢鞍橋』の「面影小町」では「サシ旅老女若女」とあるので、『謡曲義解』の「秀」は『驢鞍橋』の「面影小町」で【面】を読んでいると言える。『驢鞍橋』の八十二にはその「若女」について、

亦、哀ヤゲニト云処ニテ、右ノカゲノ女トテ、若キヲ連レ出シタシ

と書かれていて、若い女を連れて出るところが正三改作【面】の眼目の一つであったと知られる。【面】では、③「サシ」の「古へ」と「今」を比べる述懐を「旅老女若女」の二人で謡わせ、「今」の小町（百歳の姥）からは「カゲ」、「面影」でしかない「古へ」の全盛期を、観客の目にはツレの姿で想起させることが、【卒】

以上に効果的であると考えたらしい。その「百歳の姥」の「今」、【卒】も【面】も小町は「諸人に恥をさらし」とする部分を【有】は「諸人に恥とせられ」と改める。【有】すなわち『謡曲義解』の「秀」はこの小町を悟道の姥と見ていて、諸人は小町を恥と蔑視するが、小町自身は前世の業を思うことはあつても、「今」蔑視されることを苦にするわけではない、九十九歳まで少将の怨念に狂乱し続けても、狂乱し尽くして百歳の「今」は悟道に到達したという理解を示している。

【卒】3段では、卒都婆問答でワキを言い負かした小町が戯れに詠んだ歌を、【面】と【有】はそれぞれ次のように改めている（適宜私に漢字を当て、濁点を付す）。

極楽の内ならばこそ悪しからめそとは何かは苦しかるべき【卒】
捨る身に残る心のあらざれば迷悟りと云事もなし【面】

頼むぞよ心の内のやすからめそとは何とて苦しかるべき【有】
『謡曲義解』の「秀」の見るところ、【卒】は小町に勝利を宣言させるのと悟道が落ちるが、歌で「外は」と「卒都婆」を掛けた手際は評価できる。【面】はワキが小町を「悟れる非人」と礼賛したのに対して、小町が歌で悟ると言えば迷いになると返すのはよいが、「卒都婆」を掛けた【卒】の手際を生かせない。「秀」は、小町は悟りの人らしく、凱歌を上げるより、ワキの礼拝を謝して偈の代わりに歌を詠む姿勢が似合わしいとの立場から、歌を改め、ワキの教化を「むつかし」と鼻であしらう【卒】【面】に対して、「はつかしの僧の教化や」と恐縮する小町像を打ち出している。

【筈】4段では、感服したワキが小町に名乗りを促すと、小町が恥じらいながら名乗ることにする。その時、『謡曲義解』の引用本文（宝生流寛政版謡本）では、小町が、名乗るから死後は名帳に名前を記入してほしいという文句を言い添える。ワキも名帳に記入することを請け合う。【面】も【有】もこの名帳に関するやりとりを削除している。それは臆病・未練の言動であり、「向上ノ法問」をなした小町に似合わないから削除した、と『謡曲義解』の「秀」は解説している（宝生流の現行謡本でも素謡の時は謡わないとする）。その名乗り、「出羽の郡司小野の良実か娘」を、【有】は「常陸の国玉造義景か娘」と改めている。『謡曲義解』冒頭に一説に従うとあり、「秀」は種々古説を参照した上で【卒】【面】とは異なる説を採用した。その理由は、小町の名乗りに続く部分に引用される『玉造小町子壮衰書』の表現との縁を、「玉造義景か娘」は想起させやすいということにあるが、それなら、良実が近江国玉造庄で出会った少女を猶子とし小町と名付けたという説に従い、【卒】【面】の名乗りのままとすることもよかった。【有】は【卒】【面】が小町がいにしえは遊女であったとする部分も「采女」に改め、「秀」は『謡曲義解』の冒頭（自註巻初）で、采女の中から優れて艶麗なる者を選び、その官女の一名、またその居所を小町と呼ぶとし、この部分の注釈でも、倡家の遊女なら九十九夜まで通い詰めた深草の四位の少将を拒否することはなからう、官女の采女ゆえに逢いたいと解している。

【卒】4段では、小町がいにしえと比べて「百歳の姥」の「今」を恥じる気持ちの表現を、【面】と【有】はそれぞれ次のように改め

ている（表記は前掲部分に同じ）。

かゝる思ひは有明の、影恥づかし我が身かな【卒】

かゝる気色は有明の、影あはれなる姿かな【面】

かゝる気色は有明の、影かすかなる姿かな【有】

【卒】の「かゝる思ひ」とは「百歳の姥」の「こんな比類のない物思ひのある」（大系）意であるが、「つくも髪が掛かる」意を掛けている前の句からの流れ、後の句の「我が身」への流れからすると、心の内よりも見た目の「気色」の方が分かりやすいと、【面】と【有】は判断したのであろう。「有明の」も、「有明の月影に見られることも恥ずかしいわが身であるよ。」（大系）の意を、【面】と【有】は有明の空に消え残る月のような、影の薄い存在感を言う意に改めている。そして、愚痴の女性が少しばかり仏道に志したところで、大日のような仏の悟りや、僧が修行に専念する朝日の位に及ばないことと、影もかすかに落ちぶれた姿とを掛けて、小町が慨嘆するところを「秀」は一曲の眼目と見て、「有明小町」と名付けたのであると言う。一方、「面影小町」の曲名については、前述のとおり、ツレの「若女」を老女小町の「カゲノ女」として登場させることに由来するが、「秀」は、前の句の「つくも髪」が『伊勢物語』六三段の歌「百年に一年足らぬつくも髪我を恋ふらし面影に見ゆ」（『謡曲義解』では下の句を「我を恋ゆらし面影に立つ」とする）を踏まえることから、歌の下の句の「面影」を連想させる点に注目して、正三が「面影小町」と名付けたと推定している。

4段の終わりから5段にかけて、【卒】では少将の怨念が取り憑い

て小町が狂乱する場面を、【面】では小町が若く盛んな時にそのようなこと（「古へのうき事」）があった、それを慙愧懺悔のために今、ワキの前で再現して見せるという形に改めている。昔年の非を恨み、後悔するから、悟道に近づく今があり、今なお少将の怨念に取り憑かれるのでは悟道が崩れる、卒都婆問答の小町像と統一が取れないと見て、「秀」も【面】の改作を支持するようである。【卒】の中世的な魅力はむしろその不統一感や落差に見いだすべきであろうが、少将生前の恋慕が怨念となり、その後数十年も取り憑いて両者に変化がないばかりか、小町が悟道に近づく意味をどう合理的に受け止めればよいのか、正三も「秀」もとまどい、「古へのうき事」を思い出すと恨めしいことにして、過去から襲来する怨念のすさまじさを描くより、過去の再現を懺悔の功德とする処理を選んでいる。【面】ではワキに促されて小町が少将の百夜通いの物まねを始める時、「アヒノ男烏帽子狩衣」という文字が挿入されている。【卒】の「物着アシライ」に相当するかと思われるが、アイの男が後見とは別にどういう役割で舞台に出るかは不明である。

【卒】6段の百夜通いの物まねでは、百夜目を待たずに死んだ少将の怨念が取り憑いて、今もこのように狂乱させられると結ぶところを、【面】では怨念が取り憑いて「一度」物に狂ったことがあったと改める。今はその時、一度限りの強烈な体験を再現するという正三の主張が現れている。「秀」も正三の改作を「此文体宜シ」と評価している。「秀」は卒都婆問答でワキを論破した姿が小町の悟道の到達点であり、ワキに出会う前にすでに「真の道に入りし」と見る立

場から、【卒】7段「ギリ」の「さどりの道に入らふよ」を、「今カラ悟道ヲ求ル」のは「老女ノ見識ニハ似合ヌ」、「此結文ガシマラヌ」と批判している。少将の怨念が取り憑いて狂乱したのが一度なら、またそれを機縁に「真の道」に入ったのなら、その後の絶望的な時間間の堆積にはどういふ意味があるかということには、正三も「秀」も思い至らないらしい。同じく少将の百夜通いを題材とする「通小町」でも地獄にいる少将に若い小町を配するように（ともに幽霊）、正三も「秀」も「百歳の姥」に若い少将の怨念が取り憑く組み合わせは受け入れがたく、【面】ではことさら「若女」、「カゲノ女」を同道させることにしている。しかし、【卒】では、少将を死なせたその後の長い余生の中で、小町は繰り返し少将の怨念に襲われ、狂乱して罪を忘れることが許されない。そういう体験が小町を鍛えてワキを論破させ、都を離れて「さどりの道」に入ろうとさせる。【面】と【有】は【卒】本来の主題を解さず、継承しない改作と言えるが、【卒】の主題論を見直す視点に気づかせてくれるところに、『謡曲義解』の注釈史上の存在意義が見いだせる。それは少し前に書かれた『謡言粗志』などにも当てはまることであり、現代の作品研究の水準で裁断するより、現代人には思いがけない角度から再検討が可能になる、その契機として活用すべき注釈書として位置づけたい。

謡曲義解 卒都婆小町 五（表紙題簽）

卒都婆小町 卒都婆ハ今俗ニ云塔婆ノコナリ、小町ハ、古ノ美女

ノ名也、元本ニハ、出羽ノ郡司小野良実ガ娘ト有リ、一説ニ、常陸ノ国玉造義景カ娘トアリ、今此一説ニ従フ、小町ト云ハ、官女ノ一名ニテ、其居所ヲ指テ云フ辞也、采女ノ中ヨリスグレテ艶麗ナルヲ撰ミ出シ、別ニ居ケル処ヲ、昔、小町ト云ヒシナルベシ、此謡曲ハ悟道ノ至妙ヲ云ヘリ、筆楮モテ何ソ解スヘケンヤ、昔、高野上人ノ中、達識ノ名僧ガ作レル処トカヤ、然ルヲナホ正三和尚添削シテ、面影小町ト名ツケタリ、秀、積年此謡言ニ心魂ヲ入レテ、有明小町ト云ヲ兼テ作レリ今此三様ノ本文ヲ載セテ、古言ハ無点ニシ、正三ノ作ハ○点ヲ用ヒ、秀ノ作ハ●点ヲ加フ、其作意添削ヲ以テ、着眼受用ノ工夫ヲ、見ルベシ、嗚呼是開悟ノ道標也

山は浅きに隠れがのく深きや心なるらん

仁者ハ山ヲ好ム寂然不動ノ位ヲ山ト云楽ミハ心ノ中ノ山水ニ世ノ中遠クナルゾウレシキト熊沢了介ノ読メル歌ニ同シ禪家十牛ニ入塵垂牛ノ意有テ大隠ハ朝市ニ有リト云ニ同シタトヒ山ノ端ノ浅キ処ニ隱遁ストモ心ダニ俗機ニ遠ザカラハ深キ山ノ奥ニ住ムト同シカラント云義也

是は高野山より出たる僧にて候、我此度都にのぼらばやと思ひ候

紀州ニアリ金剛峯寺ト云弘法大師開基也

サシ夫前仏は既に去り、後仏は未だ世に出ず

前仏トハ釈迦如来ヲ指ス既ニ涅槃ニ入り玉フ故ニ既ニ去リト云後仏ハ弥勒菩薩ヲ指ス此菩薩ハ五十六億七千万歳ノ末世ニ出世シ玉フト釈迦如来トカレタリ故ニ未タ世ニ出ズト云

夢の中間に生れ来て、何を現（右訓「うつゝ」と思べき）

夢モ現モ不分明ノ義也仏ノ在世ニ後レ仏ノ出世ニ先ダチタレハ夢ノ中間ノ今生ナリ此時ノ衆生ナレハ何ヲカウツト思案分別スルゾ思案ハ悟道ノ妨ナリツキハナシテ本来ヨリ得心スヘキヲたま／＼受難キ人身を、うけ、逢難キ如来の仏教にあひ奉る事是そさとの種なると思ふ心もひとへなる墨の衣に身をなして

右古本ノ正文

○実に受がたき人身を受け、逢ひ難き如来の教法を学ひて、解脱の道に趣くといへとも、幻化を悟る外はなし、世の中を、何にたとへん朝ほらけ、漕行く舟の跡の波、立居空しき旅の空、行も帰るも夢なれや、さめぬ心を歎くなり、

右正三ノ添削也タマ／＼受難キト云へハ人体ハ万物ノ中ノ靈性ユヘニウケガタキヲタマ／＼ト受テト云意ナルベケレトモ語意弱シ仏教ニ逢ヒ奉ルトアレトモ仏ノ口授面命ヲ受ザルヲナレバ逢奉ルトハイワレズ又仏教ハ悟ノ種ニアラズ悟ノ種トハ己レノ心ナリ仏教ハ心種ヲ育フノ肥（右訓「コヘ」）物悪草ヲカリ土ヲ和ラクルノ道具ナリ又衣ノヒトヘハヨケレトモ心ノヒトヘト云ト偏固ニナル仏教タリトモ執着スレハ悟道ノ病トナル

○正三ノ謂ル所ハ人身ヲ受クルコトハ実（右訓「マコト」）ニ難キコトユヘ実ニ受ガタキ人体ヲ天地ヨリタマワリ陰陽ノ靈精五行ノ純粹トヲ受ケ得テ其上国ニヨリ仏法ノナキモアランニ仏法盛ンノ国ニ生レ出テ逢ヒ難キ釈迦如来ノ教法ヲ学フナリ如来ノ教ナレハ仏教ト云フニ及バズ重言之様ニナル後年ニ生レテ聞クコトユヘ学

ヒテト云ヘリ解脱ノ道ニ趣クトハ悟リノ入口ナリ人身ハ眼耳鼻舌身意ノ六識ヨリ塵欲入テ本心ヲシバルユヘ明德ノ智開キガタシ能ク是ヲ放下シテ本来ノ一心而已ニナリタルトキヲ解（右訓「トケ」）ケ脱（右訓「ヌ」）ケルト云テ則仏（右訓「ホドケ」）ノ訓語ハ解脱（右訓「ホドケ」）也今此僧志ヲ立テ解脱ノ道ニハ趣キ向フトイヘドモ幻化ヲ悟ルノ外ハナシ幻ハマボロシ不定ノ義化ハシラズカワル神変ノ義夢ノ中間ノアリサマ一切ハ幻ノ如キ者ニテヨク定マリタルコトモナキモノナレハ喜フベキコトモナク又悲ムベキコトモナシ一切ノ変化スルコト皆一心ノ妙用天心ノ造化道心ノ神化他ナシ一是レ妙ヲナス世ノ中ヲ何ニタトヘタラバト云ニ朝ボラケノ烟霧（右訓「アイ」）々タル中ニ漕行ク舟ノ跡ノ波ノ如シ舟下ノ波ト舟外ノ波ト豈別アランヤ四海一波ナリ立モ波立ヌモ波本来空ナリマシテ旅ノ事ナレハ立居モ定メズ空シキ旅ノ空ヲ今此娑婆ノ旅ハ舟ノ水上ヲ行ニ異ナラズ行クト云モ帰ルト云モ夢ナラシ夢サメバ行カズ帰ラズ扱モ夢ノ中間ノ凡僧覺（右訓「サメヌ」）左訓「サトレヌ」心ソアサマシキト歎クコトナリ

上歌 生れぬ先の身を知れば、憐むへき親もなし、おやのなければ、
我為に心をとむる子もなし、千里を行くも遠からず、野にふし山に
泊る身の、これぞまことのすみかなる

正三八高野山ヨリ出タル僧ト云ニ心ヲ留ル子モナシト云ハフデキ也ト云ヘトモソレハ余リ穿タ説ナリ是ハ生レヌサキノ身ヲ知ルト云ヨリ親モナシ子モナシトハ謠ヒテ、尤ノ言句ナリ先ツ生レヌサキノ身ヲ知ルト云ハ生前ハ無体象ノ一氣ナルコト知ル者即満天

満地ノ一氣是アツテ是ナシ然レトモ是ハ此体象ノ欲識ニ敝覆セラレテ遂ニ糞泥ニ錦珠ヲ埋ム生レヌ先ノ身ハ五尺五体ニアラス青雲渺々白浪漫々此解(右訓「ゲ」)ニ移ルトキハ哀憐スヘキ親モナク親ナキユヘニ我モナシ我ナケレハ我モ親ニアラス故ニ我カ為ニ心ヲ止ムル子ナシ親子ヲ看破スルハ倫ヲ破ルニアラス天地古今一切国法ヲ破リ人道ヲ乱リツベシ悟リテモ花ハ花ナリ月ハ月雀ハチユウ／＼鳥カフ／＼

上歌月諸共に出て行く、／＼雲井百敷や大内山の山守も、かゝる憂身はよもとがめじ、木隠れてよしなや鳥羽の恋塚、秋の山、月のかつらの河瀬舟

月諸共ニ出テ、行クハ夜行ノ義ヲ、云ヘリ心理ニ明ヲ伴フ趣ヲ含メリ雲井百敷大内山ハ内裏ノヲナリ同シヲナレトモ雲井ハ公卿ノ席百敷ハ百官ノ寮大内山ハ禁宮ノヲナラン山守ハ衛士ノヲ也斯(右訓「カ、ル」)憂身ノアサマシキハヨモヤ見答メマジ木隠ルモ詮ナキコノマ、ニツト往カント云フヲ一毛頭ニ集メテ得道スルナリ本ヨリ無ノ見(右訓「ケン」)ニ墮チズタシカニ実有ノ見ニ実得スルコト也無父無母無弟無子ノ義ハ盡天盡地如獅子王ノ位也千里ヲ行モ遠カラズト云ヨリ道行キノ正文ナリ人情旅行ハ親子ニ心ノ残ルモノナレトモ出家ノ身ナレハ其俗情ナクテ千里ノ行脚モ隣家ヲ訪フ心地ナリ千里豈遠カラシヤ足ユカズ地ユク歩進メズ地退ク行覽ノ心一步ヲアゲザルサキニ彼ニモアリコ、ニモ在リ生レヌサキノ身ヲ知ル位ヨリ来リ且行旅ノ身ハ定メヌコナレトモ俗家ノ安樂ハ出家ノ好ムヘキ安宅ニアラズ山野ニ臥泊

スルコソ真ノ安栖ナルヘシヒキヨセテ結ベハ芝ノ庵(右訓「イヲリ」)ナリホドケバ本ノ野原ナリケリト云ヘルモカヤウノ境界ニヤアルベシ

○詞 爰彼を打過候へは、津の国難波あたりに着て候、向ひに見ゆるハ、淡路嶋、こなたの磯は住吉の、岸の姫松代々かけて、神さひたる有様、荒面白の浦の気色や候、暫くやすらひ候へし、
正三ノ作意ナリ

爰カシコヲ打過ルトハ世法仏法ノ一切諸有ノ法ヲワタルコト向ヒニ見ユルハ淡路嶋トハ彼岸ニ至リガタキコト此方ノ磯ハ住吉トハ娑婆ノ苦欲界ハ凡夫スミヨキ様ニ思フコト松ノ代々カケ神サビタルハ俗中ノ大道心ノ義

身は浮草をさそふ水／＼なきこそ悲しかりけれ

古本正文

○次第シテ 身は浮草をさそふ水、／＼流の末のいかならん、

正三作意

●身は老ひぬれと花と見は／＼散るを盛りと知るやらん

秀ノ愚意

身ハ浮草ヲサソフ水トイヘルハ小町ノヨメル歌ニヨレリ浮草ハ根ノ土泥ニ入着セヌモノユヘ水ニサソワレテ彼岸此岸ト流転スル也シカモ水ヲ母トシ生々スル物ユヘ水ノナキコソ悲シカリケレト古文ニイヘリ正三八流ニ墮テ穢所ニモ清所ニモ至ルモノユヘ流ノ末ノイカナラントイヘリ女ノ身ハ男ニタヨリテ生涯ヲ送ルモノユヘ古文モ正三モノノ処ヲ云フテ魂氣ハ魄形ニ隨着シテ仏

前ニテハ信心ヲコリ争鬪ノ所ニテハ怒氣生スルガ如シト云意ニヤ

秀ノ作意ハ玉造ノ小町ノコト見ルユヘ此文ヲ異ニス文意ハ身老ヌレト花ト見バト云ハ心実ニ対シタル言葉ナリ散ルヲ盛リト知ルヤラントハ花ハ根ニ返ルト云義ナリ世間ニテハ若キサカリノウツクシキヲ花ト思フベケレト花ハ清浄ニテ天地ノ誠ヲ開ク粧ヲ賞美スレバ老テ不浄ナク脂汗潤濁ナクシテ骨立筋高ノ姿タトヒ垢深クトモ清キ処アランハ花ニアラズヤ散ルハ盛リ開クハ落ル陰陽昼夜生死輪廻ノ道理散ヲ盛トハ人ノ將ニ死セントス其言フ「ヤ善(右訓「ヨ」)シ

サシ(行の右に「正三ハサシ旅老女若女トセリ」) 哀や実に古へは、慵慢尤甚しう翡翠のかんざしは、婀娜(右訓「アダ」)と嬋娟にして、楊柳の春の風になびくか如し、

慵慢トハホコリアナドル義ニテ年壯ンニ色ノ麗キヲ以テ人々寵慕スレバソレニホコリテ人ヲアナドル「甚シ翡翠トテウツクシキミドリノ鳥ナリ其色形(右訓「イロカタチ」)ニ文飾彫鏤セル筈ハ婀娜トタヲヤカニ嬋娟トウツクシキアリサマ細腰玉肌ノ美ナル「楊柳ノ春ノ風ニナビクガ如シ

又鶯舌の轉りは露をふくめる糸萩のかことはかりに散そむる花よりも猶めつらしや今は民間賤の女にさへきたなまれ諸人に恥をさらし嬉しからざる月日身に積つて百年の姥と成て候ふ

古本正文

○桃花の唇、鶯舌の轉り、露を含める糸萩の、花にたくへし身の末

の、今は民間しつ(左「賤」字)のめ(左「女」字)にさへきたなまれ(左「穠」字)、諸人に恥をさらし、嬉しからぬ月日身につもり、百年の姥と成て候、

正三作文

●桃花の唇、鶯舌の轉り、露を含める糸萩の、花にたくへし身の末の、今は民間しつのため(左「女」字)にさへきたなまれ、諸人に恥とせられ、塵のうき世の月日身に積り、百年の姥と成て候、

秀ノ作意

古文ニカゴトバカリニ散リソムル花ヨリモナヲ珍シヤト云ハ花多クツキタルモ面白ク美シケレトモ又少(右訓「スコシ」、左訓「カゴト」)バカリ散ソムルモ惜ク風情アリテ珍シキト云「コレモヨク聞ヘタレトモ正三八省キタリヨツテ美色ヲ賞スル言葉ニ桃花ノ唇ト云字ヲ加ヘテ唇ノ朱キヲ賞セリ鶯舌ノ轉リトハ音声ノヤサシキヲホメタリ露ヲ含メル糸萩トハ潤沢アル花ノ形氣ナリ花ニ比(右訓「タグヘ」)シ身トハ花ニハ容(右訓「カタチ」)カト想フト云意也今ハ民間賤ノ女ニサヘキタナマレルトハ同シ女ドチサヘキタナク思ヘル男ノ心ハナヲサラナリキタナキトハ汚穢也諸人ニ恥トセラル、ナリ古文正三トモ恥ヲサラシトアリ此姥ハ悟道ノ姥ナレバ恥トシ恥ル氣アツテ心頭念々アルベカラズ前世ノ業相ヲコソ觀ズラメ恥ノ所ニ固執スマジク思ヘリ恥ヲサラシト云文ニ少シ固滞ノ念アルユヘ自他ノ文ヲ以テ秀ハ諸人ニ恥トセラレト改ム嬉シカラヌ月日身ニツモリト云モ又念頭味々固団ノ一物去ラヌ様ナルユヘニ古文正三ノ作ヲ改メテ秀ハ塵ノ浮世(右訓

「ウキヨ」ノ月日トシテ塵ノ縁ニ積リノ字ヲタシカニセリ百歳ノ姥ニナリシハ九十九夜通ヒテ百夜（右訓「モ、ヨ」）ヲ待タテ死シタリシ怨念ニ狂ゼル有リサマニヤ九十九歳マデ狂乱シタルベクモ定メテ百歳ニテ悟道シタルナルベシ九十九夜迷乱シタル少将モ死シテ、其苦念虚々漠々九十九歳其怨念ニ我ヨリ狂乱シテ狂ジ尽セル時ハ百年ノ後ノ土也姥ハ老女也老女ハ坤也坤ハ帰藏也生シテ一凝ノ肉死シテ一塊ノ土也人ノ死ヲ前言シテ百年ト云百年ノ老陰覺悟ノ目的作者ノ妙筆愚夫イカンガ註セン此謡曲一篇ハ筆ヲ把テ解ヲ忘レ筆ヲ投テ味ヲ認メ得ヌ喝

下歌 都は人目つゝましや、若もそれとかいふまぐれ

都ニテハ昔小町ノ名ニタチタルヲ知レテアレハ人目ヲツゝシマヌト若ハソレトイフ人モアラシカト夕暮ヲ待チ出ル意ツゝムハツゝシム也則包ミカクス意モアリ夕間暮ノ間ノ字ハ助語ナリ此老女悟道ノ者ナレハ白昼モイトワズ都ノ中ヲ徘徊スベキヲニテ恥ヘキヲモアルマジ様ノモノナレトモソレハ悟道ガ崩ルゝナリ悟リテ後ハ世間法モ看破スル者ナラバコナリ木隠レト云モ大内山ト云ニ古歌ノアル言葉ヲトレルモノナリ今コノ身ニテモ雲上ノ事ヲ述ルハ昔宮仕シタルユヘノコナラメ鳥羽ノ恋塚ハ文覚ノ築ク処ナリ袈裟御前ノ首塚ト云節婦ノ遺跡ナリ秋ノ山月ノ桂川皆都ノ名所ナリ

こきゆく人は誰やらん／＼

古文

○浮ぶやのりの道ならん／＼

正三作文

古文ニテハ人ハ誰ヤラント云テ彼ノワキノ僧ニ此方ヨリ問答ヲシカケル氣味アリ正三八河舟ノ浮フヤ法ノ道ナラント観念ニ云カケシハ面白キ様ナリ

シテ詞あまりに苦しい候程に是なる朽木に腰をかけやすまはやと思ひ候

古文

○シテ詞姥 古人云く、心は万境によつて転ず、転ずる所実に能幽なり、流に随て性を認得すれば、喜もなく亦憂もなしと也、我もさすらへの身なれば、流に随て下り候へし、村々里々を過ぎ、天王寺に着て候、是より住吉へと心さし、阿部野の原に立出ぬ、是に朽木の候、腰を懸て休まはやと思ひ候

正三作文

古文ノ意ハ老衰ノコトユヘ只今ノ行路ニ苦シキト云フニトレルナラシ正三ノ意ニハ体苦心苦ノワカチモ甲斐ナク耳ニカゝルユヘニ河瀬舟ノ浮フト云ユニシニ禪語ヲ引謡スル義ナラン凡ソ人心ト云モノハ万境ニヨツテ転（右訓「カワ」）ルモノナリ天地ノ間ハ虚々実々ナレトモ大河ニカゴヲ入レテ其籠ノ中ニ入レタル魚ノ種（右訓「シユ」）分（右訓「ワケ」）アルガコト花ノ境月ノ境愁ノ境喜ノ境静ナル境喧キ境カク万境アルニ酒宴ノ席境ニ出テ念仏モ云レズ法会ノ境ニテ謡モウタワレス其境々々ニヨツテウツリカワル其心ハ二ツモナク三モナク主人公ハ一ツナリ其主人公ガイゾレナリトモ現境ニ随テ転スル処ウソニテモナク喜ノ席ニテハ喜ノ

心口実ニナル能クト云テ念ヲ入レカヲ入レテ幽ナリ幽ハカスカ
ナル義ニテアサハカニナクハカリシラレ又義ナリ目ニミエズ耳
ニ聞ヘ又処ヲ幽ト云ナリ見ユル所ガシカト見トメラレ又意ナリ
サレトモ無固無我無意無必ノ位ニナラヌト実ニ能幽ト云位ニ至
レ又ナリ不斗意ニアレヲカウシテト思事ガ固必スルト目モ口モ
アカズ人ノ云フ事ガ目ニモ耳ニモ入ラヌモノナリ是ハ主人公ヲ
一ト間処ヘヲシコミタルユヘナリ主人公ハ広堂ノ中ニドレヘモ
カタヨラヌ様ニ坐ヲサセマシテ守護ノ義理(右訓「サムライ」)ヲ
ヲキアラフル役人ヲ目通サセテ目モ耳モ大キニシタテネバ転ス
ル処ヨク幽ニハナラヌナリ主人公ハ無仁義礼智信ノモノ本ヨリ
無眼耳鼻舌身意ノモノト云ヘリ主人公ハ仁アルモ義アルモ礼ア
ルモ智アルモ信アルモ病ナリ仁ナク義ナク礼ナク智ナク信ナキ
ト一切ノ道理ガ皆主人公ノ手ニ入ルナリ仁ガアルト仁バカリ集
ル是ヲ病ト云主人公ノ名ハ愚ト云ベシ扱流ニ随テ性ヲ認メ得ル
トハ衆流皆海ニ朝スルノ義ナリ仏者流モ聖人流モ神仙流モ同シ
「流ニ随テ下タリ」テ海ニ至レバ渺漫タル波濤ナレハ濫觴喜
ヒヨリ流出スル歌舞モ憂ヨリ流出スル念仏モ其流レ分ツヤウナ
レトモ遂ニ一ニ帰スル処ハ歌フモ舞フモ法ノ声ト云フ位力是ヲ
喜モナク憂モナシト云ニヤ性ハ本来天稟ノ名性ハハタラキナシ
心ハハタラキアリ我モサスラヘトハ流浪ト書テ行ク「正シカラ
又義ト也」タノム夫モナク思フ子モナク親ム父母モナク世ノ間ニ
カケカマウ人モナケレハ流浪ト云ナルヘシ流ニ随テ下ルヘシト
ハ桂川ニソウテ行ク「前句(右訓「センク」)ノ禅語ニモ照応ス身

ノ零落ト云ヒ女ト云ヒ発悟ノ人ト云ヒ人ニ争ハスシテ世ヲ渡ル
心持モアリ天王寺住吉阿部野ハ摂州ノ名所也朽木ニ腰ヲカケテ
ヤスマントハ今朽ハテタル姥ノ身ト同シ体ノ物ナリ

ワキ詞なふはや日の暮て候程に道を急かふするにて候

古文

○ワキ詞はや日も西の山に傾きぬ、道を急かうずるにて候

正文三

●はや日も西山に傾き東山に月出ぬ道を急かふするにて候

秀作文

古文ノ喃(右訓「ナフ」)ト云ハ呼カケノ辞ニテ此処ニハ無用ニ似
タリ正文三ノ西山ニ傾キヌト迄云テハ前文ノ月諸共ニ出テ、行
クト云後文ニヲサマリニクシ依テ秀ハ日ハ傾キ月ハ出ルト云タ
シ是即無常迅速ノ観念ニモアタル道ヲ急クハ修行地ノ不怠心ニ
アタルナリ

や、是成る乞食の腰かけたるは、正しく卒都婆にて候、教化して、
のけうずるにて候、いかに是成る乞丐人おことの腰かけたるは、か
たじけなくも、仏躰色性のそとはにてはなきか、そこ立のきて余の
所に休み候へ

乞食トハ貧人ノ「概シテ云ヘハ世間ノ人一切皆乞食ナリ別シテ比
丘ハ乞食ノ業ヲ専ラトシテ仏道修行ヲ専務トス卒都婆トハ今俗
ニ云フ所ノ塔婆ノ「也死人ヲ仏果ヲ得タルトシ供養ノ為シルシ
ノ為ノ木ナリ神道ノ幣帛ニ同シ教化シテノケントハ教テ人ノ心
ヲ変化セシムルノ義ニテ叱リテ退ケズ会得ヲサセテ退カシムル

「乞巧トハ求メ乞フ」也ヲコトハ汝ト云「仏体色性トハ卒都婆
地水火風空ノ五輪ノ体ニテ彩色モ五行ニワカチカク仏ノ体ニ勸
請シタレハ仏性ノリ移リ玉フナリ

シテ詞 仏躰色性のかたじけなきとは宣へ共、是程に文字も見えず、
きざめる像（右訓「カタチ」）もなし、唯朽木とこそみえたれ

唯朽木トコソ見ヘタルト云ハ全ク古塔ノ「ノ」ニモアラズ我モ
カク老朽チテ人身ノ色体モナケレハ人ト云フニコソアレ唯死人
ノ如キ物ニテ人ニアルヤアラズヤ無体ノ体無像ノ朽塔一如ト云
フ答ノ趣ナリ

ワキ上カ、ルたとひ深山の朽木なり共花咲し木はかくれなし

古文

○ワキカ、ル 縦ひ深山の朽木なり共、飛花落葉し転変は、無常（「情」
字を消して「常」とする。上余白に「原本には無情と書けり」）説法明かな
り、況や仏体にきざめる木、なとかしるしのなかるへき

正三文

古文花サキシ木ハカクレンシトアレトモ桜ハ花ニアラワレニケリ
ノ理ニテ花サキシ木ハカクレナケレトモ花散リテハ見分リカタ
カラン今正三ノ作意ハタトヒ深山ノ木ナリトモ飛花落葉ノナキ
ハナシ菩薩ハ有情ノ形ニモ非常ノ形ニモ化現シ玉ヘハ非常ノ草
木モ飛花落葉ノ姿全ク菩薩ノ教化体ナリ飛花落葉ニ無常ノ説法
アリ一切生死有為転変カクノ如キ常理也然ルトキハ深山ノ朽木
ナリトモ飛花落葉ノ仏教アレハ尊敬スヘシ況ヤ仏体ニキザメル
木ノナニ程文字モ見ヘズキザメル形ナクトモ何トカシルシノナ

キ「ヤアランソレハ汝ノ心ナキ鹿相ユヘト教化スルナリ

シテ上 我也賤き埋木なれども、心の花のまだあれば、手向になどか
ならざらん、詞（上余白に「正三八扱以下を詞とせず」）扱仏躰たるへ
き謂は如何に、

埋木トハ谷間深山屋後ナドニアリテ花サクトモ人知ラズ年経テ
朽果ツレハ土中ニ帰化スル木ノ「ナリ」今小町ノ身上モ埋木ノ如
クナレハ天地ノ生々ノ仁徳ヲソナヘテ花実ヲ生スル「ハ」人々ニ
賞美セラル名木モ埋木モ天眼ノ公ケヲ以テ見ルトキハ同一体ナ
リ貴人モ下子（右訓「ゲス」）モ権門全盛ノ人モ隱逸無用ノ人モ心
実ノ花サク「ハ」一切具仏心也木ヲ引テ枯槁セズ柔弱ナル中ハ是
レ此中ニ花アリト知ルヘキ「人」モ骨節屈伸シテ柔弱ナル中ハ天
賦ノ明德本来ノ仏心アリト知ルヘシ其心ノ花ダニマタアルナレ
ハ手向ニ何ソゾナラザランヤ手向トハ花ヲ手折テ仏ニ供スル「
此度ハ」ノ神詠ニ紅葉ヲ手向ニ遊ハサレタリ扱仏体タルベキ謂レ
ハ如何ニト問カケシハ面白キ手ニハナリ

ツレワキ上 夫卒都婆は、金剛薩埵、仮りに出化して三摩耶形を行ひ
給ふ、

金剛手菩薩トハ普賢菩薩ノ「ト」モ云ヘリ如来ノ御手ヨリ金剛杵ヲ
承ケ持チ玉フ菩薩ナリ薩埵ト云モ菩薩ノ「ト」大道心ヲ興シテ衆生
ヲスクワントノ誓ヒヲタツル人ナリ誓ノ動キ摧ケヌヲ金剛ト表
シ其大堅固ナル金剛ヲ以テ一切ノ魔障煩惱ヲ撃クダク也今ニ娑
婆ニ仮リニ出世化現シテ三摩耶形ヲ行ヒ玉フ、三摩耶形トハ曼荼
羅ト云テ本誓ト翻訳ス菩薩ノ衆生ヲ利益セントノ誓願神力一度

發起シテヨリ始終不變ノ義ヲ本誓ト云フ即是金剛ノ位也ソトバノ形ハ初胎ノ凝形ニテ金胎兩部ノ姿ナリ死シテ土ニ帰シ肉盡筋腐テ骨ノ残レルハ金剛ノ形ナリ人ノ死スヤ出胎前未生ノ時ニ同シケレハ生前死後ハ心性形骨共ニ相同シ卒都婆ヲ用ヒヌルコソ尤ナレ

シテ詞行ひなせる形はいかに

三摩耶形ハイカニト云フ

ワキ上 地水火風空

本誓ノ形ハ此ノ五輪也五輪トハ五ツノ輪ト云フニテ皆其象義ハ〇カクノゴトシ地水火風ノ四輪モ本来ハ空輪ヨリ生シテ空輪ニ入ル象義一体ト云フ名付テ輪ト云ナリ万物建立ノ本元物ニテ地ハ水中ノ垢ノコレルモノ火中消化ノ灰水中ニ下ツテ泥トナル凝結シテ地トナル地中水心有リ水中ニ泥必有リ地上ニ水アレハ水上必燥ク乾燥ノ氣集レハ火トナル火下ニ必湿氣アリ火上必風有リ四大皆元空ニ歸(右訓「キ」)ス火徳中央ニ有テ万物ヲ生ス是ヲ大日如来ト云ヒ或ハ不動明王ト云フ一切ノ森羅万象此四大ヲ具セザルハナシ一大ニ三大ヲ合ス地大モ水火風ヲ兼又水大モ地火風ヲ兼又火大モ地水風ヲ兼又風大モ地水火ヲ兼又其現用ノ物ヲ以テ名トスレドモ物ニ孤立ナシ其(右訓「ソレ」)唯空大乎万象ノ中ニ在テ万象ノ外ニ涉リ無色ニシテ是色ナリ空風火水地ノ五輪行レヌ時ハ道教廢スヘシ此五輪ヲ建立シテカラノ行法ナリ
シテ中 五躰五輪は、人の躰、何しに隔ての有へきぞ、
正三八隔であるへきそトス

五体トハ頭頂ニ肘ニ膝ナリ五体モ五輪ノ形ナレハ五輪ハ人ノ体ナリ円頭ハ空象ニテ天ニ位シ膝足ハ方象ニテ地ニ位ス水位ハ腎ノ臟部火位ハ心ノ臟部風位ハ口舌ノ部筋肉骨皮毛手指足指面表五孔陰孔ハ耳膺下部皆五ノ数ヲ以テ成就セリ五ハ一(右に「天地」)ニ×(上に「陰陽」)ノ二儀交錯シテ成ル字ナレハ五体五輪ハ人ノ体ニテ隔ノアルモノニアラス天地間ノ一物物ナリ

ツレ像は夫にたがはずとも、心功徳はかはるべし

天地ノ間ニ像ノ相似タル物ハ多ケレトモ心徳ノ相違アリ同シ形ノ

書物ニ儒書戲書ノ差別アルガ如シ

シテ詞 偕卒都婆の功徳はいかに

尤ノナジリナリ

ワキ一見卒都婆永離三惡道

三惡道ハ地獄餓鬼畜生也一タヒ卒都婆ヲ見レハ永ク三惡道ヲハナル、是ソトハノ功徳ナリ
シテ中 一念發起菩提心それもいかでかをとるべき
一念ニ菩提心發起スルトキハ三惡道永離シテ即身成仏ノ至リナレハナニシニ卒都婆ノ功徳ニヲトル「アラ」ヤ卒都婆ヲ造建シテ永離三惡道ノ法ヲ開クモ一念發起ノ菩提心ノ人ノ教導ナリ菩提心トハ仏道心ト云義ナリ
ツレ 菩提心あらば、など浮世をはいとはぬぞ
菩提心アル人ハ浮世ヲ厭ハセヌ也今此娑婆ニ示現シテトアリワザノ安樂ノ淨土ヨリ苦患ノ穢土ニ出現シ玉フニ菩提心アラハナゼニ浮世ヲイトヒハセヌサヤウニアサマナル体ニテアルコソ

カナシケレト云ハアシキ誥也

シテ下 姿が世をも厭はゞ社、心こそいとへ

姿ノミニクキキタナキヲ以テ世ニ厭ヒハジハセヌ心ノミニクキキ

タナキヲバイトヒハヅルナリ身ニ綺羅錦繡ヲマトヒ玉輿ニ乗ツ

テ世間ニカ、ヤクトモ心キタナキトキハ玉壺ニ溺(右訓「イバリ」)

ヲ盛ルガ如シ姿ニカマヒハナイソ心法第一義ト云ト也

ワキ心なき身なればこそ、仏体をばしらざるらめ

正三八しらさらめトセリ

心コソイトヘト云テ心宝持護ノトヲイヘトモ心ノトリ得ナキ身ナ

レハコソ仏体ヲシラズニ卒都婆ニ腰カケタレトナジル

シテ詞 仏体としれば社そとはにはちかつきたれ

古文

○仏体隔なければこそ、卒都婆には近付たれ

正三文

知レバコソト云テハ少シ争フテ且イチノアル様ナリ五輪五体ハ人

ノ体ト云ニ引モドシテ千言一致ノ趣ナリ人体モ仏体モ隔ナケレ

バコソトバニハ近付タレタトヘハ子カ親ノ膝ニ腰カケタルト

同シ更ニテ他人ニハセマジキトナリ

ツレさらはなど礼をばなさで敷(右訓「シキ」)たるぞ

さらはト云ヲ正三八さりとてはトセリ是ナラズ

仏体隔テナキト云トナラハ仏体ト云トヲ知リテアルナリ知ラハナ

ニユヘ礼拜シテシキ休(右訓「イコ」)ハザル

シテ 逆も臥したる此卒都婆、我もやすむは苦しいか

古文

○逆も臥したる此そとは、やすむも功德ならざるや

正三作体

●朽て臥したる此卒とはやすむも同じ老の身の

秀ノ作意

我モヤスムハ苦シイカト云フ古文ハ苦シイユヘニ礼ヲナストヲ致

シ得ザリシト云トナランソレデハ問ニハ能応スレトモ後文ノ夫

ハ順縁ニハヅレタリト云フ辞ガウクナリ正三ノヤスムモ功德ナ

ラズヤト云フ後文ノ順縁ノ句ニハヨク叶ヘドモ礼ヲナサズニシ

キタルハイカニトセメタル答ニソムク功德ニナルト知レハナヲ

礼ヲスルハズナリ秀ノ作意ハ朽テ臥シシコソトバヤスム我モ

亦同シ老朽ノ柔脚タラレテ卒都婆ニヨリタリソレトモ仏体ト隔

テヌ人身ナレバ卒都婆ハ老朽女老朽女ハ朽塔ナリシカシ隔テナ

ケレバコソ近付タレト云ニ成仏ノ縁ニフレル志ハ見ヘタリ礼ヲ

ナサヌハ朽臥一致ノ開キナリ

ワキ 夫は順縁にはづれたり

僧ノ手前ニテハナルホド老朽ノナサシムル処ハヨクシレテアレト

モ前答ニ隔テナケレバコソトバニハ近付タレト云ハレシ処ニ

同シシキ物ニモ仏体ノ結縁ノ機アラワレテアルニ礼ヲナシテ仏

ヲ仏ト見ザルトキハ順縁ニハツレルナリソレデハ修行願志ノ相

違トトガムル

シテ詞 逆縁なりと浮ふへし

古文

○逆縁などかいとふべき

正三文

大燈ノ前ニアルモ照ラサレ後ニアルモ光ヲ受ル順縁ノミニアラス
逆縁トテモ救ハセ玉フハ仏ノ大慈ナリ順貴福男智ノサトリテ逆
賤貧女愚ノサトラレズハ仏教ハ小事ニテナクテモスムト云フナ
リ

ツレ 提婆か悪も

前答ニ取付ラレテヨクナジリタルツレノ僧カラ化服シタリマタ
コヽニテハ信服アサシナジリヨリシラズヽ移リテ悪ト云モ善
ナリト云ニ至テ能クヽ從ヒ服スルナリ提婆ト云ハ釈尊ノイト
コナリ人ニ君父ヲ弑スルヲラスヽメ仏ヲ殺ントハカリ仏弟子ヲ
打擲シテ遂ニ其罰ニヨリ大地ワレテ地獄ニ落ちヌ是ハ天照皇ニ
進雄尊アリ舜帝ニ象ノアルゴトク物ノ始ハ人々心服セヌモノユ
ヘニソノ一族ノ中ヨリ叛逆シテ其罪ヲ蒙ルヲコレ逆教ノ大智也
逆教ナケレハ順教立タズ漢ノ高祖ノ韓信ヲ大元帥ニシ玉フトキ
ニ樊噲ガ韓信ヲソシリテ罪ヲ蒙ル是モ提婆ナリ古今此趣多シ

シテ 観音の慈悲

提婆ノ罪惡ニヨツテ地獄ニヲチ衆生ノ見コリスルニヨリ惡種ニ遠
サカルハ即観音ノ大慈悲ト同シコナリ下医ハ藥ヲ毒トシ中医ハ
毒ヲ毒トシ上医ハ毒ヲ藥トス

ワキ 槃特が愚痴も

槃特ハ愚痴ニテ仏ヨリ十四字ヲ五百ノ弟子ニ仰セテ毎日ヽ三年
ノ間教ヘシニ覺得ズ遂ニ仏ヨリ直授シ玉ヒテ漸覺得ヌカホドニ

覺ノアシキ愚痴ノ人モ其覺ユヘキコトハ一ツニテ其一ツサヘ覺ヘ
得レハ大智惠ノ人ノ千万無量覺ヘテ迷トナリ邪魔ニナルヲ放下
シ捨離シテ其一ニ覺ヘ定ヌル処ト一致ナリ上智下愚トハ同位ナ
リ

シテ(上余白に「正三はこのシテを詞とせり」) 文殊の知恵

智者ハ智ニ迷ヒ才子ハ才ニ迷フ其迷ノヌケテ智ナラヌ位ヲ大智ト
云

ツレ 悪といふも シテ 善なり

古文

○ツレ 悪と云も善なり

正三意

古文ニテハマダカケ合ニナル正三ニテハモハヤ問答此処ニ至リケ
レハ同意ノ參得ナルユヘツレモ感化シテナルホド惡ト云モ善ナ
リト一致ノ妙処ニ至ル也サテ惡ト云モ善ナリトハ提婆ノ惡ト観
音ノ慈悲ト鈞合セテ會得ノナルヲナレトモ不凶云出シテハ分リ
兼ルヲナリ惡ガ善ニテアルヘキ様ハナケレトモ毒モ藥トナリ藥
モ毒トナル理ナリ皆其時処位ノ用ニテ君父ノ敝命ニシカリ玉フ
モ慈悲ナリ慈悲本ヨリ慈悲ナリ皆慈悲ノ一根ヨリ生スレハシカ
ルモ慈悲愛スルモ慈悲惡ト善ト生所ニ二ツナシソノ生スル所ハ
一ツナリ逆カラモ順カラモ惡カラモ善カラモソレソノ一ツニ出
テ取得テ本ニ歸レハ其一ト云フナリ維摩文殊默然不二ノ法問ト
ハ則コノ位ナリ且又コヽマデ云ツメテマダ惡ト云モトツレカラ
誥リテハマケ角力ノ禪ニツナガルト云野諺ニ似テ大ニヲカシキ

「ナリ争フニ及ハズ勝ツニ及ハズ道機明々一致ノ所ニ至レハカク彼我ヲ忘（右訓「ワス」）レテ悪ト云モ善ナリト云ノガ知識ナリワキ煩惱と云ふもシテ菩提なり

是本（右訓「ホン」）ワキトシテトフタリニテ誦フユへ同一心ト云位ニテ面白シ（ママ）キ「ナリ元来前文ニ提婆ガ悪ハト諷へハ彼我アレトモ提婆カ悪モト諷フ処カラ彼我一体心覚不二ノ義ナリツレ菩提もとシテ植木にあらずワキ明鏡またシテ台になし

古文

六祖ノ頌ニ本ヅク文也神秀首座ノ頌ヲ六祖ノ作リカヘラレタル文ナレトモ仮リ物ノ文ユへ問答ノ終リニハ少弱シ依正三文左ノ如シ

○ツレ 始知衆生 ○シテ 本来成仏 ○ワキ 生死涅槃 ○シテ 猶如昨夢

正三作体

逆縁モ順縁悪モ善悪モ慈悲愚痴モ智恵煩惱モ菩提ト云フトキハ成仏ノ道ヲ修行スルニハ何モセワナ「ハナキ也トント本来ノ処ニキテ見レハ万物一体ニテ高下モ大小モ善悪モナキゾサテモヲカシナ事ニ心ヲ苦シメ或ハ喜ヒ或ハハラタタルゾト発悟スル機ナリ心中ニヒバク喜怒哀楽サへ捨レハ六識ノ外物外道ノマヨヒナリ況ンヤ身外ニ属スル事ハイタキモカユキモ飢モ渴クモアツイモ寒イモトント本有ノ大主人公ニハ覺ヘノナキ「タトヘハ今無上ノ尊位ニ居玉ヘル君ノ大国ヲ五体トシ玉ヒ庶民ヲ血水トシ君公ハ精気神ノ宝位ニマシ「名付テ心トシテ見ルニ下ニ争ヒ

怒リ恨モ飢ヘ泣キ悲ミ非業ノ命ヲ墮スニ心位ノ大君ハ少モ知シ召シ玉ハ又モノナリサレバ指ヲ切テ痛ムト云モ指ギリノ痛ニテ本ノ大主人公ノ心ニ尋テ見レハシリ玉ハ又ハズナリソレハト云ニ役人ガ押ヘテ云ハ又ナリ其役人ノアシキラステヨキ役人ヲケバアタマノギリ「カラ足ノ爪先マテチヨツトシタ「モ大主人公ニ応スル位ニ至レハ応スルノ物ナキ様ニナルソレガ始テ知ル衆生モ本来ノ初元ハ仏ニ成テ居ルノガ幼子（右訓「ヲサナゴ」）ノ次第「ニ知恵付キテ仏ニ遠クナルゾ悲キト云義ナリ仏ト衆生ト別ナル物ナラハ仏道ハ衆生ノデキ又「ナリ仏ハ衆生ニナツテ見テ我ト同シ「ジヤト云ヲ知テ衆生ノナルベキ道ヲ開カレタリ君ノ臣民ヲ治メ玉フモトントノ下民ニナリ下リテ見テ治メ玉ヘハデキル理ナリ万物下カラ生セヌハナシ天氣ハ上ヨリ及フトイヘトモ一陽來復シテ天氣地下ニ至ル時ニテナクテハ万物蕃茂ハセヌモノナリ生死ハ涅槃ナリ涅槃トハ不生不滅ト云「ナリ生前不死死後常生ノ位中現無々嗚呼生死モ猶昨日ノ夢ノ如シ何ニカ有ル何ニカ有ル何ニカ無キ何ニカ無キ咄（右訓「トツ」）

上同 実本来一物なき時は仏も衆生もへたてなし本より愚痴の凡夫を「救はん為の方便のふかき誓の願なれば逆縁なりとうかふしと懇に申せは誠に悟れる非人なりとて僧はかうへを地につけて三度礼したまへは

古文

○此理を知る時は、何の疑ひあるべきと懇ろに申せは、真に悟れる非人なりとて、僧は頭を地につけて、三度礼し給へは

正三作文

秀ハ此機を知る時はトセリ又 三度礼し給ふなりトス古文ニテハ
 実本来一物無キトキハト云ヨリ禪機ノ向上ヲ云ヒタリ正三文ニ
 テハ既ニ問答ノ結句ニ四句ノ文ヲアケテヨク論シ尽セルユヘ此
 処ノ文ハ惣結語ノ様ナ作リナリ扱古文ノ仏ノ衆生トカワリナキ
 ト云モ愚痴ノ化夫ヲ救ハント云モ逆縁ト云モ皆前々ノ文句ニア
 リテ重出ニナルナリ依テ正三八此処ニテハ何ニモ云ハズニ此理
 ヲ知ルトキハト云治メタリ併理ト云ハスジト云テ先ツハ形象ノ
 上ニアルヲナリ機トカ義ト云ガヨキナリ義ハワケトモ云ヒノリ
 トモ云マツサス辞也此等ノ問答ノ義ヲ知ル時ニハ何ノ疑フベキ
 ヲガアル一切ノ事ニ疑フベキヲハナキナリ小町ネンゴロニ申シ
 サトセハ真ニ悟レル非人ナリト云テ僧ハ頭ヲ地ニツケテ三拝セ
 シナリタマヘバト云ヨリ玉フナリト云ガシカトスル様ナルユヘ
 秀ハ也ト留メケリサテ此僧モ向ノ人品ニカ、ワラス道ノ道タル
 ヲ敬拝シタルハヨキ僧ト見ヘタリ非人ト云ハ經文ニ人ト非人ト
 云ヲアリソレヨリ出ルヤ此国ニテ穢多ノ類ヲ非人ト云人ニアラ
 ズト云ト也餓鬼畜生ノ部属ニ入レリ併ナガラトントノ下列ニテ
 上列ノ仏如来ト前後ノ位ナレハ仏ト云モ非人ト云テ人非(右訓「ナ
 ラ」)ズト云トシカルトキハ非人ト云モ仏ニ似タリ三界ヲ家トシ
 主モナク妻モナク家モナク器財モナク衣服モナク飲食ナク水牯
 牛ナク膝々トシテ草泉ヲ念フ被毛戴角ノ行力出家ノ行法モ畜生
 ノ行ノ如キヲ貴フ業(右訓「ゴウ」)ヲ恐レズトカキ仏ハ乞食ノ業
 ヲ法トシテ衣食住ハ他ノ施行ニマカセ飢渴寒雨死病ヲ恐レズ無

二無三ニ天地ノ賜ヲ重宝スルナリ天地ノ賜ヲ知ラヌトキハ真ノ
 乞丐ナリ衣食住ノ美ナリトモ人ノ人ニナリタト耳目鼻口ノ用
 ヲナス処ト生前ト死後ト飢ル者ト寒キ者ト飢寒ナキ者ノ差別カ
 知レヌトキハ真ノ乞丐人ニテ食フヲヨリ外ニ能ハアルマイト見
 タノナリ片岡山ノ飯ニウヘシ非人ニ聖徳太子ノアイタモフモ即
 乞食也

シテ上 われは此時力を得猶戯れの歌をよむ極楽のうちならばこそ
 あしからめそとは何かは苦しかるへき 下同 むつかしの僧のけうけ
 や／＼

古文

○シテ上 我は此時たわむれに、一首の歌を詠しける、捨る身に残る
 心のあらざれば、迷悟りと云事もなし、下同 むつかしの僧の教化や
 〳〵

正三文

●たわむれなからきこしめせ一首の歌を詠しけるたのむぞよ心のう
 ちのやすからめそとは何とて苦しかるへき はつかしの僧のけうけ
 いや／＼

秀ノ作意

古文ノ我ハ其時力ヲ得ト云ハアマリ手ツヽナリ老女ノ悟道ガヲチ
 ルナリ又極楽ノウチナラハコソアシカラメト云モコヽニ極楽ハ
 イラヌヲ見破リタキヲナリソトハ何ニカワト云テ卒都婆ノ文字
 モ兼テヨメルハヨシ正三ノ我ハ此時タワムレニト云ヘハ真ノタ
 ワムレニナルタワムレナガラト云ヘハ卑下ノ辞ニナルナリ捨ル

身ナレハ本ヨリ残ル心ハナシサレハ乞丐トナツテモ残心ニモナ
キト云フチト見識ヒクシ僧ヨリ悟レル非人ト称シタルヲ悟レハ
悟ルト云フナシ悟ルト云カ迷ナリ依テ迷ヒ悟リト云フモナシト
云フハヨシサレトモ卒都婆ト云カ句中ニ人ルガ手ギワヨキナリ
古文正三文共ムツカシノ僧ノ教化ヤト云ヘリ先剋カラソナタノ
教化ガムツカシイト云フカソレデハイカ、ナモノナリ僧ガ下
論ユヘ頭面礼足セリ然ルトキハ此方ノ云ブンガムツカシイ教化
ジヤト云フカサアルトキハムツカシノ僧ニ教化ヤト云意ニナリ
秀ニテハ僧ヨリ礼拝シテ服従珍重アルユヘ其志ヲ謝シテ偈ノ代
リニ歌ヲヨメルナリタワムレナガラト謙退シテ云ヘルハ聞テ下
サレ一首ノ歌ヲ詠シケル頼ムトコロハ心ノ中ノ安平ナランコトヲ
身外ノコトハ何トナルトモ苦シカルマジ恥カシヤ僧ノワレラノ愚
痴ナル非人ヲ恭敬シ玉フカナト恐レ入りタルト云フ
ワキ詞 扱おことは、いかなる人ぞ名を御名乗候へ

古文

○扱おことはいかなる人ぞ御名乗候へ

正三文

シテ詞はつかしなから名を名のり候へし名帳に入れてなからん跡を
弔ひて給り候へワキ 中々の事名帳にいでて弔ひ候へし先名を御名
乗候へ上シテ 是は出羽の郡司小野の良実か娘小野の小町かなれる
果にてさふらふなり

右古文

○シテ詞はつかしなから名乗候べし是は出羽の郡司小野の良実が娘、

小野の小町がなれるはてにて候

正三文

●シテ詞はつかしなから名乗候へきか我は常陸の国王造義景か娘小
町かなれるはてにて候

秀ノ作意

古文ノ過去帳ニ入レテ跡ヲ弔テクレト老女ノ云フコトニシタハ甚弱
シ向上ノ法問ヲシタル老女ノナニシニカヤウノ臆病未練ヲ云ヘ
キゾ正三ノ削リタルハ尤ナリ

古説ニテハ小野ハ山本六代ノ孫(右訓「ソノ」)中納言良実ノ子出
羽ノ郡司右京亮良実家カ女也ト云或ハ良実大和守ニ任シ上洛ノ時
近江国王造庄ニテ少女ニ値ヒ猶子トシ小町ト号スト云々秀ハ玉
造リ小町ノ事ニシタル論ヲ以ス此謡曲中玉造小町壯衰書ノ文多
シ扱名乗候ベシト云キルハ子細ナリ法問ノ外ハ謙遜ナクテハ返
テ悟道ノ人ノ言ニアラス仍テ名ノリ候へキカト云ヘリ
ワキツレ人上 痛はしやな、小町はさもいにしへは游女にて、

古文

●人上 いたわしやな、小町は、さも古へは采女にて

秀ノ改文

遊女トアルモアシキニハアラズ沢庵和尚遊女ノ画讃ニ仏ハ法ヲ売
リ祖師ハ仏ヲ売ル汝ハ五尺ノカラダヲ売テ一切衆生ノ煩惱ヲ安
ンズ色即是空空即是色ト曰ヘリシカシナガラ采女ト云フヘキ義
ハ自註巻初二載ス昔ハ雲上翠簾中ノ美人今ハ樹下破笠底ノ乞丐
是我カ一生ノ中ニスラカク盛衰アリ況ヤ未来ヲヤト云フ戒ニナ

ル且倡家ノ遊女ニテアルナラ深草ノ少将ノ九十九夜マテ通ヒテ
逢フヲユルサヌト云フノアルヘキ身ヲ鬻テ資ヲ乞フコソ遊女
ナレシカレハ是ハ采女ト云ガ逢ガタキ恋ニテ事ハ能クアタレリ
花の像(右訓「カタチ」)かゞやき、桂の眉墨青うして白粉を絶(右訓
「タヤ」)さす 同 羅綾の衣おほうして桂殿の間に余りしそかし
古文
○花のかたちかゞやき、桂のまゆすみ青うして、白粉を絶さず、羅
綾の衣数々に、蘭麝(右訓「ジャ」)の匂ひみち／＼、桂殿の間にあ
まりしと也

正文コ、迄ワキノ語処

●花のかたちかゞやき桂のまゆすみ青うして白粉を汚すと也

●同 羅綾の衣数々にらんじやの匂ひみち／＼、けいでんの間にあまり
てあたかも碧浪の蒼浜にたゞみ彩雲の翠嶺に廻るかことし暈暉たる
かほばせは芙蓉の暁の浪に浮へるに似たりと也

●下シテされは容色を事とし

●同 遠きは忍ふ思ひをなし近きは愁の心を尽す

秀ノ作添一本ニ從フ

詩ニ花ニハ容カト想フト云ヲ花ノカタチカ、ヤキト云ヘリ黛(右
訓「マユズミ」)トハ眉ヲソリテ見カケヨキ様ニ心ノマ、ニ画ク墨
ノノ香氣アルト月ノ弓ハリニ形ヲシタルトヲ兼テ桂ノ黛トイヘ
リ青フシテハ黒カラスアイノ色ヲモテル美色ヲ云白粉ヲ絶サズ
ト云ハ色アシキナリ詩ニ云脂粉顔色ヲ汚スヲト云ガ面白シ白
粉ヲツケレハ面ノウツクシキ白サガケガレルトシウスモノアヤ

ノ衣服種々数々アリテソレニ蘭麝ノ名香ヲ芬々トシメ桂(右訓「カ
ツラ」)ノ殿(右訓「トノ」)ミチクテアリ桂殿トハケツカウナル
宮殿ノヲサテ数々ノ衣裳ハトテモタクフヘキ物ナシ碧(右訓「ミト
リ」)ノ浪ノアヲキ水ギワニタ、ミヨリミドリノ雲ノアヲキミネ
ヲ廻ルガゴトシ暈暉(右訓「カ、ヤク」、左訓「ウツクシキ」)顔色ハ
芙蓉ノ花ノ暁ノ塵モタ、又浪ニ浮ヘルニ似タリシカルガユヘニ
容色(左訓「カタチヅクリ」)ヲ事(左訓「コト」)シテ遠キ方ノ人々
一度ハ忍ヒテアワント思ヲナシ近ク日ニ見ル人々ハ恋情迫テ愁
苦ノ心ヲ尽ス

下シテ歌をよみ詩を作り 下同 酔を勧むる盃は閑月袖に静なりまこ
と優なる有様のいつ其程に引かへて

古文

○下シテ 和歌の誉れ、世にすぐれ 下同 月を友とし花にめで、万里の
外に心を尽し、露霜雪のあはれをも、言葉のたねと詠じつゝ、優に
やさしき有様を、いつぞの程にひきかへて

正文

秀ノ意左ノ如シ

下シテ 歌を詠み詩を吟し 下同 月を友——万里の外に心をは
なち——引かへて

外正文ニ從フ

和歌ノホマレ世ニスクレト正三ノ作リカヘタルハ老女ノ慢心増長
ヲタシテ面白カラス歌ヲヨミ詩ヲ吟詠シ月ヲ友トシ花ニ愛(右訓
「メデ」)万里ノ外マテモ心ヲ放チ又此放心ハ迷ノ放心悟リノ放心

ニテハナシ露霜雪ハ一年ノ終リ殺枯ノ氣ヲ己レハ壯ナルニホコ
リテ我ニ霜雪ノ來ルヲ知ラズ却テ言葉ノ種ト詠シツ、優トハ
芸能ノスグレタルヲ其アリサマモイツゾノ昔ニ引カヘテト云フ
上歌かうべには霜蓬を戴き、嬋娟たりし両鬢も、はだへにかしけて
すみみだれ、艶々たりし双蛾も、遠山の色を失なふ、百年にひと
せたらぬつくもがみ、かゝるおもひは有明の、影はづかしき我身か
な

古文

艶々ト云フ正ニハ宛転トセリ カ、ル思ハ有明ノ影恥カシキ我身
カナト云フかゝる気色は有明の影あはれなるすかたかなトセリ

●かうへには霜蓬を戴き嬋娟たりし両鬢も秋蟬のつはさ破れ宛転た
りし双蛾も遠山の色を失なふ百とせにひとせたらぬつくもかみ
かゝる気色は有明の影かすかなる姿哉

秀ノ作意

霜蓬トハ霜ニ枯レ乱レタルヨモギノ髪ノツヤナク乱レタルキタ
ナキヲ云嬋娟トウツクシキ両鬢ノ蟬ノ羽ヲノベタル粧モ破レ
乱レテ宛転トマガリテ蛾(右訓「マユ」)ニニタルイロヨキフタツ
ノ眉之遠山翠色ノゴトキモ色ヲ失フ百トセニトセタラヌ九十
九(右訓「ツクモガミ」)トハ髪ノ白キヲ云百ノ一ヲ去テ白ノ字ナリ
海ニアルツクモト云藻草老女ノ髪ニニタルユヘニ云フトムヘリ
白藻ノ乱レタル物ナラン江浦草(右訓「ツクモクサ」)ト書クス(右
訓「カ、ル」)気色(右訓「ケシキ」)、左訓「キシヨク」ハ有明ノ消
へウセハセデナヲノコリケル影モ蕭條(右訓「カスカ」)、左訓「アウ

レサミシ、(一)ナル姿ナルカナト云フ卒都婆ニ腰カケ休ミカ、ルト
キガ宵ニテ今ハヤ階方ニナルマテ法問シタルト見ユ有明ト云ハ
仏ノサトリヲ大目ト見テ次ニ僧ノ専念ニ修行ノ位ヲ朝日トモ見
レハ衆生ノ身ノ別シテ愚痴ノ女性ノ少ハカリ仏道ニ志ヲハコ
バシタレバトテ有明ノゴトシ本ヨリ骨ニモ心ニモ男女ノ別ハア
ルマジケレドモ男子ノサトリ日光ノゴトク女子ノサトリ月光ノ
如シ今又血氣顔色ノ有明ノ影モ寥亮(右訓「リョウク」)、左訓「カス
カ」トヲチブレテアルトカケテ云ヘリ依テ有明小町ト名ヲ付ケ
タリ正ニ影ハツカシノ処ヨリトリ又業平ノ百トセニトセタラ
ヌツクモカミ我ヲ恋ユラジ面影ニタツト読メル歌ニモトリツキ
テ面影小町トセシナラン扱古文体ノ嬋娟タリシ両鬢モ肌ニ悴ケ
テ墨乱レト云文キレノニナリテ甚手ヅ、ナリカ、ル思ヒノ字
キ、ニクシハツカシキノ字モ耳ニサワルナリ

上ロンキ地 首に掛たる袋には、如何成物を入たるぞ

古文

●首にかけたる袋には如何なる物の入りたるぞ

秀ノ文

物ヲ入レタルト云ハ老女ヲ悟レル非人ナリト三排シタルニハ私意
ニ見ナシタルアシライユヘニ秀ニテハイカナル物(右訓「モノ」)
ノ入りタルト私ノ意ヲ以テ求メル言葉ヲ云カケズ
シテ上けにも命はしらねども、あすの饑を扶けんと、粟豆の乾飯(右
訓「カレイヒ」)を袋に入れて持たるよ

粟豆トハ品々ノ交リタル食物也カレ飯トハ日数ヲヘテホセタルヲ

云ニヤ餉(右訓「カレイキ」)ト云字ヲカクトキハ家ヨリ野ニユク
トアリ野外ニテ食スル為ニタクワヘタルヲ云カ饑ヲ扶ケント持
タルハ悟道ニイカ、シキ様ナレトモ道歌ニ云クサトリテモ石ノ
ヤウナト思フナヨマ、モクヒタシネムトウモアルト云ヘリ此文
ハ食事

土地後におへる袋にはシテド 国のあかつける衣あり

古文

●垢膩の衣の入りたるよ

秀文シテ処如此諷フ

垢膩(右訓「クニ」)トハアカアブラト云フ此文ハ衣事

土地ひちに掛たるあしかにはシテ 白黒の田鳥子(右訓「クワキ」)

あり

古文

○脇にかけたるあしかには

正三文地所如此諷フ是(右訓「ゼ」)ナリ簀(右訓「アジカ」)ヲ肘

ニカケルト云ヨリ脇ニカケルト云ガヨシ慈姑ハ白クワイ鳥サテ

ハクロクワイ白黒ノクワイト云ハ魚肉ナキヲ云ニヤ

地 破れみのシテ 破れかさ

是ハ住ノ事 高位ヨリ下タリノテ非人ニ至ルマデ衣食住ノ三ツ

ハ離レヌモノト云フナリ

地 おもてばかりもかくさねは 下シテ まして霜雪雨露

破簀破笠ノ事ノ気色ヲイヘリ破レミノカサヨリ下文ハ出家ニ家ナ

キノ道理ナラン

同涙をたにもおさふへき袂も袖もあらはこそいまは路頭にさそら
ひ往来の人に物を乞ひえぬ時は悪心また狂乱の心つきて声かわり
けしからず

古文

○かゝる雲を払ふべき、袂も袖もあらはこそ、今は路頭にさそらへ
の往来の人に物を乞ふ、野に臥し山を家として、さわる心は更にな
し其古へのうき事を思ひ出るもうらめしや

正三文

野ニフシ山ヲ家トシテト云フ

樹下石上に起臥て(上余白に「この句刻本には見えず諷の原文に従へり」)

秀ハ如此セリ

涙ヲヲサユト云古文狂乱又発スルムカケユヘナリ乞エヌ時ハ悪心
マタ狂乱ノ心ノツキテト云文古文辞甚ツタナシ霜雪雨露ノカ、
ル零ヲ払フヘキ袂モ袖モアラバコソ袂ハ底ノ方ヲ云袖ハ惣名ナ
リ扱今ハ路頭ニタチテ流浪シ行方モ定メズユキ、ノ人ニ物ヲ乞
ヒ樹ノ下石ノ上ニヲキフシテ障ル心ト云テハ更ニナシアワレ
ムベキヲヤノナク心ヲトムル子モナキナリ恥モナク喜モナク只
今タ、カクノゴトキ者ナリ其昔ノウキヲ思ヒ出ルモ今更ウラ
メシキヲカナワカキ血氣ノ時ハヲカシキモノヨト昔年ノ非ヲウ
ラミ後悔スルナリ是ヨリ以下古文ト正三ト大ニ異ナリ
上シテツヨク なふ物たへなふ御僧なふ ワキ詞 何事そシテ 小町か許
へ通はふよなふ ワキ おことこそ小町よ何とて現なき事をは申そ
古文 老女ノ悟道崩レテ是(右訓「ゼ」)ナラス

○ワキ 古へを思ひ出るもうらめしいとは、如何なる故ぞや、

○シテ いはしとは思へども、さんぎさんげの功德のために、古への有様語で、きかせ申候へし、若きさかり色深く、人の思ひを身に受て、文玉章の数々に、心をつくす其中に、一入思ひ深草の、四位の少将の執心、身に報ひ来て、物ノ化となり、狂気せし事、中々申も浅ましう社候へ

○ワキ 扱は少将の念力に依て狂気し給ひけるぞや、同じくは狂氣の有様を、まのう（左「学」字）で御覽候へ

○シテ うらめしとは思へども、逆もさんげの功德なれば、学うて御僧に見せ申すべし

○（行の右に「アイノ男烏帽子狩衣」）かりそめに高間の雲に心をかけ、胸の埋火もえやらず、富士の煙と立登り、行ゑもしらぬ我思ひ、あら心くるしや／＼

右正三文

高間ノ雲ニ心ヲカケト云ヲ秀ノ意ニテハ高間の原に雲をかけた云タキナリ

惣体ノ意ワカレリ老女昔ノウキヲ思ヒ出ルモウラメシヤト云ヘルユヘニ其古ヘノウキヲトハ何ゾト僧ノ問ヘハ云フマジトモ思ヘドモ慙愧懺悔ノ功德ノ為ニ古ヘノ様子ヲ語テキカセ申ベシ年若クサカシナルトキニハ色情フカク人ノ恋慕ノ思ヒヲ身ニウケシニ文玉章カズ／＼ニ心ヲツクシクドク人アル中ニモ一入ニ思ノ深カ、リシハ深草ノ四位少将ナリ名字シレズ作り言（右訓「ゴト」）也其念ニヨツテ狂シタルト云フ僧ヨリ其狂態ヲマナフテ

見セト云ガ能（右訓「ノウ」）ノシカケナリ手ギワ面白シ

○シテ 今日も早暮て候、小町がもとへ通ふよなう

正三文

人目ヲ避ルナリ

○ワキ おことこそ小町よ、こは何事ぞ

正三文

マナフテ見セト云僧モ小町カ狂中ニ入テ狂ヲアラワセハコハ何事ゾト不審ヲ云ナリ一切ノコサキノ人ヨク合点ニテシテ見セト云フテ居ナガラシテ見スルトソレハ何事ト云モノナリ品ニヨルト所望シナガラ止ヨト云モノナリ

シテ いや小町と云人は、あまりに色か深うてあなたの玉章、こなたの文、カ、ル上 かきくれて降五月雨の色 空言なり共、一度の返事もなうて カ、ル上 今百年に成か報ふてあら人恋しや荒人こひしや

古文

今百年ニ成ガ報フテヨリ以下ヲ

○空しく過しうらめしや、人恋しや、あら人恋しや

正三文如右宜シ

不諾（右訓「イヤ」）小町ト云人ハ、色欲フカクテ人ノ恋ルコト多ク
レトモ、此方ヨリモ彼方ヨリモ文ヲコスコ五月雨ノフルゴトク
ナレトモ空言（右訓「ソラコト」）ニモ一度モ返事モセス空ク月日
ヲスゴサヌコノウラメシヤ人コヒシヤア、人コイシヤト云フ
ワキ人恋しいとはさておことにはいかなる者のつき添てあるそ

古文

○人恋しやとは、おことの心か、誰人のことぞ

正三文

古文ハ前文ヨリノ引カケニテ生霊死霊ノ物化ト見タリ、正三デハ
マナフ狂ユヘニ人コヒイシヤトハソコモトノ心テ云フ趣カ恋シ
ヤトハ誰人ノ事ゾト問フナリ前文ニ一入思ヒ深草ノ四位ノ少将
トコトワレドモ此方彼方ニコヒ人多キト云ニツケテ又外ニアリ
ヤト念ヲ入レテ問フ也

シテ小町に心を懸し人は多いよなふ中にも思ひ深草の四位の少将
の

古文

○シテ扱小町に心をかけし人は多しといへども、積る思ひは深草の
四位の少将の

正三文

扱ト云字ヲ夫ト秀ハ諷タシ

中ニモ思ヒ深草トハ正三ノ作ニハ前文ニアルユヘツモル思ト致シ
タリツモルト云ガツヨクテヨシ

上同 恨の数のめぐり来て、車の榻に通はん日は、何時ぞ、夕暮く
月社友よ通路の関守は有とも、とまるまじや、出たゝん、関守はあ
りとも留るまじや出立む

正三文ニテハ日ハ何時ソ夕暮ノカヘシト関守ハアリトモトマルマ
ジャ出テ立ント云カヘシトヲ省ク

又月コソ友ニトセリ

カヘシく諷フハ狂体ナラン恨メクリ来テ車トウケタリ榻ハヨリ

ノホリスル車前ノ板ナリ榻ノ上ニ百夜ネヨトカ女ノ云フニ通ヒ
ツルト云物語ヲ云フモノナラン通ハン日ハ何時(右訓「イツゾ」)
ト云フイツモく懈怠ナクユク「也月コソ友ニト云ハ恋ノ心ノ
ヤミニマギレ月夜モイトワヌ」

下シテ 浄衣のはかまかいとつて

浄衣ハ白キ布ニテ制シタルト云ヘリ

シテ下イロヘ打上 浄衣のはかまかいとつてく

正三此二句ヲ省削ス

下同 立烏帽子をかさをり、狩衣の袖をうちかついて、人目忍ふの通

ひ路の、月にも行き、闇にもゆき、雨の夜も風のよも、この葉の時

雨雪深し、

正三八通ヒ路トツメテノ、字ヲ脱ス立烏帽子ニ狩衣ノ袖ヲウチカ
ツイテ人目ヲ忍ハントセシユヘニ烏帽子ノ折レタルヲ風折トア
ヤニ云ヘルナラン正三ノ間ノ男烏帽子カリキヌトハコレヨリ思
ヒツキタルナラン九十九夜トモ通フトキ八月ノ夜モアリヤミノ
夜モアリ雨ノ夜モアリ風ノ夜モアリ秋ノ末ツカタヨリカヨイソ
メタルニヤコノハノ時雨雪フカシトアリ和歌ノ道ハ恋歌ヲ以テ
至妙トセリ聖人ノ道モ然リ好色ノ事ハ中心ヨリ発シテ四体毫髪
ニ達ス君ニ父母ニカクホド思フ人ノアラハ我必至忠至孝ト称セ
ン月闇雨風雪サヘ忍フ通ヒ路君父ノ命カ用事ナラハ義理ニテユ
クヘシ中心ヨリ苦ニセズシテユク人アラシ昔ノ「ハ聞クバカリ
ニテ見タル証拠ナシ今ノ世ノ人ハ万人ニ九千九百九十九人迄無
実不忠ノ人ナリ我坐スレハ涙襟ヲウルホシ臥スレハ涙頤ニ交ル

已(右訓「ヤン」)ナンノ今ノ人ト相逢テ何ヲカ云ハン山王ノ社
前ニ拝シテ三猿ノ戒ニ從シカ如來ノ膝下ニ礼シテ六根ノ用ヲ防
シテ上ノ軒ノ玉水とくくくと

古文

○軒の玉水泪の雨

正三文

軒ノ玉水ト八十露盤ノナリ前文風雨等ヨリウケ來ル文意ナリ泪
ノ雨トハアマリニ小町ノツラク引ツケテアワザリシニ苦ミナケ
イテ思ノ至極スル処涙トコルナリ

行ては帰りかへりては行一夜二夜三夜四夜七夜八夜この夜豊の明
りの節会にもあはてそかよふ庭鳥の時をかへすあかつきの榻のは
しかき百夜までと通ひいて九十九夜に成たり

古文

○心の闇にかきくれて、木幡の山の細道を、たとるくととはこひ(右
に「あゆみ刻本」)行く、峯高うして谷深し乱れ心にさそはれて、行
ては帰り、帰りては行き、一夜二夜三夜四夜七夜八夜九夜、とよの
あかりの節会にもあはでぞ通ふ庭鳥の、時をかへす暁の、榻のは
しがき百夜迄と、通ひて九十九夜に成たり、

正三文

涙ノ雨ニヨツテ心ノ月暗クヤミニカキクレテ城州強田ノ山ノ細道
ヲ辿(右訓「タト」)ルノ緩歩シテ行ケハ峯高フシテ谷深シ峯
ノ高キトハ煩惱ノ谷ノ深キトハ思ノ煩惱ト執着ニヒカレテ

乱ル、心ニサソワレユク波立モ水波静ナルトキモ水乱スモ心治
マルモ心身体ハ心ノツカヒモノ何レカ心ニサソワレテハユクモ
ノナリ行テハ帰り帰りテハユキトハ通フ併作者ノ妙筆ニテ軒
ノ玉水ノ行ツ帰りツ九十九夜ニナルヲ兼ネタリ行テハトハ一
夜二夜三夜四夜七夜八夜九夜ト算ヲ積ミ帰りトハ八夜七夜四夜
三夜二夜ト算ヲ積ミカヘリテハ行キトハ三夜四夜七夜八夜九夜
十夜ト算ヲ積ム帰リト云トキハ行キツキタルツギヘモトリ行ク
ト云トキハ行キツクスナリ初算二十夜ヘユクヘキナレトモノ
數ニ初マルユヘ九ニ終ル結算ハ成就ノ數ノ十二行キ止ル初中結
ト言葉通ストヨノアカリノ節会トハ十一月中ノ辰日ニ今年ノ稻
ヲ神ニ供ヘテ豊熟ヲ祝ヒ又明年ノ熟ヲ祈ル大礼ニテ上卿外弁モ
禁裡ニ集リテ歌舞ノ遊モアルト云中ノ午ノ日トモ云ナリソレ礼
会ニアワズニ小町ノモトヘカヨヒ雞ノ時ヲモカエズ鳴クト共ニ
宵ヨリ忍ヒテ暁マテ榻ノ上ニ丸寝シテ九十九夜迄行キ通ヒシナ
リ

下シテあら苦し目まひや 同胸くるしやと悲しびて、一夜をまたで
死にたりし深草の少将の其怨念のつきそひて、かやうに物にはくる
はするそや

正三八其怨念のつきそひて一度物には狂ひけるぞやトセリ此文体
宜シ

九十九ノ極數マテ辛抱シテ今一夜ノ処ニテ死シタレハ思フ小町ニ
ハ逢得ズ況ンヤ仏ニモカホドニ慕ヒ奉ルナラハナドカ救ヒ玉ハ

サラン一夜をマタテ死シタルハ少将ノ積怨乎幸乎不幸乎迷乎悟乎万事百ノ物ガ一ツニナツテ破ル、モノナリ其一ツガトニモカクニモ得ガタキ位ナリ

下是につけても後の世をねかふそまこと成ける沙を塔とかさねて黄金のはたへこまやかに花を仏に手向つゝさどりの道に入らふよ

古文

○是を菩提のたねとして、真の道に入りしより、無明深夜の夢さめて、世々の悦ひきはまれり、三界火宅の内を出て、迷悟凡聖一筋に、大道広く行うよ

正三文

世々の悦きわまれりト云ヲ秀ハ一塵苦念も更になしトセリ古文ノ是ニツケテモ後ノ世ヲ願フソ誠ナリケルトハ三世ヲ看破シタル法問ノ老女ニハヨハシ沙ヲ塔トカサネテ供養ト思フナラ卒都婆ニ腰ヲカケシヲカレコレ云フタハ固辞付ナリ花ヲ仏ニ手向ツ、トアラハ心ノ花ノマダアレハ手向ニナドカナラザラント云ニアワズ悟リノ道ニ入ラフヨト今カラ悟道ヲ求ル程ノ老女ノ見識ニハ似合ヌ文勢ナリ物ハ初ハムタトシテモ終リノク、リガキカネバナラヌニ古文体ニテハ初中ハ能々至妙ノ論ニテ此結文ガシマラヌナリ正三ノ作尤ナリ一度物ニハ狂ヒケルゾヤト世間ハ花ニ月ニ文ニ武ニ男ニ女ニ金ニ銀ニ衣ニ食ニ家ニ財ニ歌ニ舞ニ糸ニ竹ニアルトアラユル物ニ狂フアルモノナリ仏学者少シ見悟ノ口ガ開クト得タト覚ヘテ狂ニナルモノナリソノ時コレ

ハ虚（右訓「ウソ」）ジャ我ハ実ト思フタニウソヲイタシテイタゾ悟覚ナリト思フタハ狂顛ナリト顛ルガ出来ルト直ニソレカ真位ナリ煩惱豈他心ナランヤ悟覚豈他心ナランヤ煩惱即菩提ナリ其煩惱ノ臭物ガ菩提ノ種ヲ養育スルナレハソレヲ菩提ノ種トシテコレハスマヌヲシタ狂ヲシタサテモアサマシキナカナト本来ノ性ヲ見出シタレハ真ノ道ハコレゾト広キ街道ニ出ツ然レハ無明深夜ノ夢ニウキ世ノ夢ガサメテ一塵ホドノ苦念モ今ハ更ニナキ身トナリ三界火宅ノ内ヲ出テ迷ヒノ人モ悟リノ人モ化人モ聖人モユクベキニ二筋ナシ本道ハ一筋ナリ其一筋ノ大道広直ナルヲ行フヨトテ論ヲ捨テ去リニキ

〔付記〕本研究はJSPS科研費26370203の助成を受けたものです。本資料の翻刻を許可された金沢市立玉川図書館近世史料館に感謝申し上げます。